読書感想文

最優秀賞作品

「清原太兵衛」を読んで

東小学校　三年　木村　愛実

わたしが清原太兵衛という人を知ったのは、鹿島町の社会科の副読本を読んだ時でした。

はじめは、川を作った人であるということだけしかわかりませんでした。でも、この本を読んではじめていろいろなことを知りました。

佐陀川は、雨がふったときは水がにごり、水かさがふえ流れがはやくなり、流されていきそうです。わたしがいつも見ているそんな佐陀川が、人の手で作られたなんて、ふしぎでした。川はしぜんにできたものだ、と思っていたからです。それが、何百年もむかしに、人の力で作られたなんてしんじられません。

今のように、大がたダンプカーやクレーン車のない時代に、人の力だけでできるなんてすごいと思います。

わたしが一番心にのこったのは、自分の体のことよりも、人のことを心配して、川を作りたいと太兵衛さんが思ったところです。思いやりがある人だったんだなあと思いました。

それに、小さいころからのゆめを、あきらめないなんて、すごいと思いました。今、わたしにも、ゆめがありますが、大人になってもそのゆめをもっていられるか、自しんがありません。

太兵衛さんが工事をはじめられたのは、七十四才になってからだったそうです。いやなことがあってもくじけずに、小さいときからずっと考えていたことを実行したのです。

何度も何度も反たいする村の人たちに、せっかくうったくいをぬかれて、大へんだったんだろうなあと思います。太兵衛さんは、くいをぬかれないようにするために、頭をつかい、村の人たちがねむっているあいだに、くいうちは終

わったそうです。わたしは、太兵衛さんはいつねむったのかなと思いました。

川ぞこをほるさぎょうは、頭の中で考えていたこととは大ちがいで、かなりむずかしそうでした。

太兵衛さんは、朝のまだうすぐらいころから江角の海岸へ行って、つめたい海の中に入り、体を清めたそうです。つめたくて、こごえ死にそうだったことでしょう。太兵衛さんは、じっとだまって入っていたそうです。わたしは、つらい思いを何度もしたんだなと思いました。

一七八七年の秋の終わりごろに、佐陀川はかんせいしました。よろこんでいる人々の声が聞こえるようで、わたしもうれしくなりました。

わたしは、太兵衛さんの本を読んで、いろいろなことを知りました。その知ったことは、今では考えられないことばかりでした。

友達のうちに遊びに行くときにいつも見る佐陀川は、よくごみがういています。この佐陀川は、たくさんの人の力と苦労のおかげで作られたことを思い、わたしたちは、この川をよごさないように、川を大切にしていかなければならないと思います。

ありがとう！ 清原太兵衛さん

恵曇小学校　四年　坂本　優希

私が住んでいる町は、太兵衛さんが作ってくれた佐陀川の近くの古浦です。川には、みなと橋がかかり、古浦と恵曇の町を結んでいます。私たちが松江に用がある時は、佐陀川をながめながら横の道を通って行きます。

四年生になって、社会科で太兵衛さんの事を習いました。いつも見ていた佐陀川が、太兵衛さんの作った川だと知ってビックリしました。あんなに長くて大きい川がどうしてできたのか、知りたくなりました。本を読んだり、佐陀川見学にも行きました。太兵衛橋や太兵衛きねんひなどいろいろなものを見ました。そして、私は、太兵衛さんてすごい人だったんだなぁと思いました。

昔、宍道湖の水が大雨がふるたびにあふれ、大きなひがいが出ているのを見て、

「ぼくが、こう水をなくしてやる。」

と、小さいのに国を救おう!!と考えるなんて私にはそうぞうがつきません。私だったら、こんなこう水とかがあっても人がするからいいや、と思うにちがいありません。でも太兵衛さんはちがいました。どうしたらこう水がなくなるかずーっと考えて、何回も工事願書（こうじねがいしょ）を出して、十二回目でやっと願いがかなったのです。一度思った事は、かなうまであきらめない太兵衛さんの気持ち、私もそんな強い心がほしいです。

工事がはじまって、うなだと、かたの内のところはどしゃがくずれて、作業をしていた人たちがどろにのまれてたくさんなくなりました。その時も太兵衛さんはあきらめず、お百度まいりをして工事がぶじに終わるように祈りました。佐太神社のたたりだと言われても、まけないでがんばった太兵衛さんって、本当にすばらしいと思います。

太兵衛さんのことを知るまで、私は、佐陀川をただなんとなく、見ていました。でも太兵衛さんや工事をいっしょうけんめいにした人たちについて勉強をして、今までとはちがう川のように見えてきました。いろんな人のくろうを合わせてできた川、佐陀川。私たちのくらしを便利でゆたかにしてくれる川です。

私も、太兵衛さんのように、次の時代によろこばれる何かをしたいと思います。その何かはまだ分からないけど、たくさんの勉強をしたりいろんなことにちょうせんして、みつけていきたいと思います。

ありがとう清原太兵衛さん

そしてずっと私たちを見守っていて下さい。

清原太兵衛について

鹿島中学校　三年　安達　洋子

私はあまり佐陀川に縁がなく、家も近くないし、学校の登下校の道も川の近くを通りません。だから、この川をみるのは学校の音楽室と、松江市内へ行く時だけです。

私は、その音楽室から見える景色がとても好きです。そこからは、校庭に立ち並ぶ桜の木と、その背後にどっしりとかまえた佐陀川が見えます。この川を高い所から見下ろすととても大きく、とても広く見え、とても穏やかな気持ちになります。

春は桜が咲き匂い、花弁は川の方へと散っていきます。佐陀川は、花弁だけでなく、桜そのものを飲み込んでしまうような、そんな迫力さえ感じさせます。そういう風に感じるのは、やはり、清原太兵衛と、太兵衛の率いた作業者達の川への強い思いがあったからだと思います。

この佐陀川をつくった、清原太兵衛という人の名前は、小さい頃から学校や家で何度も聞かされていて知ってはいましたが、太兵衛の生涯については何一つ知りませんでした。興味すらわかず、ずっとこのまま名前だけのおじいさんで終わるところでした。

しかし、今は違います。太兵衛の夢や人生、考えを知ってからは、私にとって憧れの人のような存在になりました。

太兵衛には、幼少の頃から夢がありました。洪水から村を守ることです。太兵衛の住んでいた村は、毎年暴風雨に襲われ、嵐の過ぎ去った後はひどいものだったそうです。いたるところに転がっている家畜の死がい。鼻をつくにおい。病に倒れる人。大きなどろ水の川となってしまった村。そんな時倒れた父。太兵衛の目に映るのは、暗く悲しいことばかりでした。

だから、もう二度とそんな風景を見なくてすむように、という思いがこの夢にはあると思います。そして、この夢を決して忘れることなく、寝る間も惜しんでひたすらその一つの夢を追いかけていた太兵衛の姿勢を知り、自分も夢をあきらめたらいけないなと思いました。どんなに無理だと思うことでも、その夢のために毎日こつこつとがんばれば、いつか、清原太兵衛のようにおじいさんになってからでも、きっとかなうんだというような気持ちになりました。

もちろんその夢をかなえるためには、いろいろと苦しんだりする時期もあると思います。太兵衛も、付近の住民の抵抗や土質の悪さ等多くの問題にぶちあたり、何度も克服して、そして川をつくりました。時には、一緒に戦った作業者の命を失うこともありました。それでも夢をあきらめなかったこと、そういう人が、かつてここに存在したということが、私にはとてもはげみになります。

私には、まだ年齢的にも若いということもありますが、ただ一つの何かのために、苦しんだり泣いたり、危ない橋を渡ろうと思ったこともありません。それに、これからの人生で、自分を捨てて必死になるということが無いというのも嫌です。間近で見ても、テレビで見ても、何

かのために必死になっている人は、とても素敵だと思います。そして、必死になった分だけ、その分だけ結果を残しています。清原太兵衛は、とても長くて大きな川を残しました。それは今になってとても多くの人達に使われ、役立っています。

清原太兵衛がいたから、今この町で米が作られ、清原太兵衛がいたから、今水害で悩むこともありません。もしいなかったら。そう考えると、この人は私達の恩人です。

今、私には夢があります。その夢はまだまだ遠くて、細かいところでいろいろと迷っています。でも、清原太兵衛のように、あせらず、ゆっくり考えていこうと思います。

優秀賞作品

ぼくも太兵衛さん みたいになりたい

恵曇小学校　三年　橋本　真吾

ぼくは、家に帰るとすぐに清原太兵衛さんの本を読みました。本の世界に入ると、むちゅうになりました。

清原太兵衛さんが、佐陀川を作ったということは知っていたけど、読んでみるとなかなか奥が深いです。長雨や大雨が降ると宍道湖の水があふれ出て、水の都松江はんをなやませたと書いてあり、びっくりしました。ぼくが生まれるずっと前、こんなことがおこっていたのか。

太兵衛さんは、松江にほど近い「法吉村」で生まれました。名は太助、絵を見ると書いてあるとおり、元気よさそうでした。寺子屋に行くと中、年上にいじめられても太助は、強い子でまけたりなんかしません。ぼくは、太助をそんけいしました。

その時、松江はんしの、青沼六郎左え門というぶしに出あいます。十五才になると太助は、太兵衛と名のります。宍道湖からあふれ出す水をせきとめる工事をするために、武士になれるように青沼六郎左え門におねがいしたのです。工事をすることは、小さいころからのゆめでした。ずっとそのゆめをもち続けていることに、ぼくはびっくりしました。

武士になった太兵衛さんは、宍道湖から恵曇のみなとまで川をほる工事を始めます。でも、太兵衛さんたちが、くいを立てると、村の人が反対して全部ぬいてしまいました。だから昼はねて、夜にさぎょうすることにしました。

人々を助けたいと思って工事をしても、反対する人がいるのは、つらいことだろうと思います。ぼくだったら、いやになって投げ出してし

まうでしょう。夜、暗い中で工事する太兵衛さんは、やりとげたいという強い心があったからできたと思います。

またほった土しゃを土手につみ上げた物がくずれて、作ぎょうをしていた人が、下じきになりました。ぼくは、考えただけでゾッとします。それで太兵衛さんは、佐太神社に、おまいりに行き、おねがいをしました。

太兵衛さんは百日間、毎日恵曇の海岸に行き、海水で、みそぎをつづけるというのです。ぼくは、やっぱり太兵衛さんを、そんけいします。すごい人です。太兵衛さんは、自分のことより人のためにつくす人です。そして、みそぎを始めて百日が近くなると、工事が順調に進むようになりました。

でも太兵衛さんは、さいごのおまいりで亡くなりました。太兵衛さんの命とひきかえに佐陀川はかんせい。三年もかかったけわしい工事でした。太兵衛さんも、きっと天国でよろこんでいると思います。

おばあちゃんが子どものころ、佐陀川には船がかよって、恵曇からは魚を売る人たちがたくさん乗られたそうです。佐陀川ができたおかげで、交通が、さかんになったようです。もちろん水害もなくなりました。ぼくも太兵衛さんのように、どんなことにもへこたれずにがんばる子になりたいと思います。

佐陀川っていいな

佐太小学校　三年　横田　千尋

わたしの家の前には、佐陀川が流れており、ゴズつり、カニとり、石ひろいなど楽しいことがいっぱいあります。また、大雨の後には、アマガエルやおたまじゃくしがにょこにょこ出てきておもしろいです。それに、夏にはすずしい風をはこんでくれるので、わたしは、こんな佐陀川が大すきです。

今まで、この川は自然にできたものとばかり思っていたのに、一学期にもらった本「わたしたちのまち鹿島」の中で、清原太兵えという人が作ったことを知り、びっくりしました。

こんな大きい佐陀川を、人の力で作ったなんてすごいと思いました。どうやって作ったのだろうか。もっとくわしく知りたくなり、さっそく「清原太兵え」を読んでみました。

むかし、宍道湖が大雨でしょっちゅうあふれていたなんて、今からそうぞうできません。こう水が出ると、本当にこわいと思いました。せっかくできた米はだめになるし、家や人が流されたりして、うえがひどくなるからです。

太兵えは、自分もうえているのに、みんなのために「水がいから村をまもろう」と決心し、何回も何回もおねがいしましたが、みとめてもらえません。今のようにきかいがないので人がたくさんいるし、お金や時間もいるからです。

やっとゆるしが出た時には、もう七十四才のおじいさんになっていました。それでも、自分のことより人のことを考え、夜もねないでがんばることもありました。

また、工じがうまく進まないで、失ぱいすることがあり、せっかく立てたくいをはんたいする人にぬかれたりしていました。特に、ぬま地ではずぼずぼはまって大へんだったようです。と中で、けが人やぎせい者が出てはんたいされても、がんばってやり通すなんてすごいなあと思いました。

佐太神社におまいりした時、手水ばちがあるけど、そこに、太兵えの工じをぶじ終わらせた

いねがいがあったなんて、はじめて分かりました。

わたしは、この本を読んでいる内に、今まで何となく見ていた佐陀川が、大切な川に思えてきました。

こんなにたくさんの人の力によってできた佐陀川が、家の前を流れているなんて、また、太兵えさんがみじかにいたなんて、すごくうれしいです。わたしは、こんなすてきな佐陀川にゴミをすてないで、いつまでもいつまでもきれいな川を守りたいです。

佐陀川と清原太兵え

佐太小学校　四年　河合史保里

わたしは、社会の見学で佐陀川を見ました。えともからしん道湖までの長い川を見て、本当に人の手で作られた川なんだろうかと、びっくりしています。

太兵えさんは、こう水をなくすためと、交通の便利を良くするために、佐陀川をつくりました。

川をつくるとき、多くの人達が反対しました。反対した一番の理由は、家や田を、川の工事にとられてしまうことです。わたしも、自分の住んでいる家をおいだされたら、住む所もなくなって、どうしていいか分からなくなると思います。

近くの人達に、打ったくいを何度ぬかれても、くじけずに、夜くいを打って、昼にねる生活をしながら工事をはじめた太兵えさんは、本当にすごい人だと思いました。

工事の間にたくさんの人が死にました。人々は、佐太神社のたたりだといったけれど、太兵えさんはそれにまけずに、神様に手を合わせて、工事が完成するように祈りました。命とひきかえに工事を成功させてくださいとおねがいしました。そして、あとすこしで川ができるのに、川が完成するまでに死んでいった太兵えさん。太兵えさんを見ていると、本当に命とひきかえになってしまったんだと思い、悲しかったです。

できてはじめて、本当にこう水がなくなり、沼地が水田になったり、ほうびをもらったり、川がいろんなことに利用できることがわかってよろこんだ人はたくさんいると思います。太兵えさんは、つくる前からできた後のことを考えていたんだと思いました。

太兵えさんが命とひきかえにしても、川を完成させたいと思った気持ちが、本を読んでいて、伝わってきました。

この本を読んだことを、えともの家で話しました。ひいおばあちゃんは、まだ一畑バスが利用されていないときは、えともから松江まで、川を船で通行していたと話してくれました。その時に、船つき場として利用していた場所が、そ父の家の前にものこっています。

また、昔は、川の水は川底がみえるくらいすごくきれいで、お米をといだり、せんたくをしていました。今、佐陀川を見ると、油がういていたり、ごみやあきかんが流れてきたり、とてもきたなくて、お米をといでいたなんて信じられません。太兵えさんが作った川がいつまでもきれいに流れるように、川をよごさないようにしていきたいと思います。

清原太兵衛を読んで

東小学校　六年　田中むつみ

私は太兵衛さんのこと、佐陀川のことを、竜君やおじいさんといっしょに勉強しました。

私がすごいと思ったことで、太兵衛さんが一三才の時、将来自分はきっと水害のない村を実現すると決めたことがあります。しかしそれ以上に、その夢を六十年間ずっと捨てず、かなえようとしたことがすごいと思います。

私も、ちょうど太兵衛さんが将来なにをするか決めたころの年です。今、私は太兵衛さんと同じように、将来「学校の先生」になりたいと決めたことがあります。ここの辺は、太兵衛さんと似ています。でも私は、太兵衛さんのように、ずっとこの夢をすてずにいられるか分かりません。だから太兵衛さんはすごいと思います。

私はこの本をよんで太兵衛さんに負けないように、自分でちゃんと夢(かな)えようと思いました。

私は、太兵衛さんをすごいと思うだけでなく、感謝もしました。それは太兵衛さんのおかげで佐陀川ができて、水害が少なくなったからです。私たちが今、大雨や大風がきてもそんなに被害がなく安心して暮らせるのも、太兵衛さんのおかげです。

佐陀川は、江戸時代から現代の私たちへのおくりもの、そんな気がします。すごいおくりものです。作るのに三年、そして作業する人数万人もいるのですから…

それに大きさだって人並みではありません。長さは八キロメートル、幅は平均して三十五メートルぐらいあります。こんなに大きなものを作るのはたいへんだったことでしょう。私がいうたいへんの一言では、いい表せないと思います。

おくり主の太兵衛さん、そして作って下さったみなさん、本当にありがとうございます。

太兵衛さんは、みんなからすごく感謝されて今もつまり二百年以上も感謝しつづけられています。私もこんな人になりたいと思います。だから将来学校の先生になって人の役に立って、いろんな人から感謝されたらいいなと思います。

私は、太兵衛さんや佐陀川のことを、竜君やおじいさんと勉強して目標ができました。それは今、自分がもっている夢をかなえるということです。この目標をかなえるため、これからは勉強、スポーツ、そしていろんな人から感謝されるようにがんばりたいです。

感謝の気持ち

鹿島中学校　一年　橋本　千明

私は毎日毎日佐陀川の流れを見ながら学校へ通っています。

晴れた日にはいつもどおり穏やかな川なのに、大雨が降り続けば、川の水はあふれ出しこの川付近をのみこんでしまうのです。

私はいつもこの川を眺めるたびに「こんな長い川を本当に人の手でほり、造り上げたのかな」とつくづく思っていました。

私は幼い頃から、母に佐陀川を造り上げた人は「清原太兵衛」さんだと聞いていて、それだけはいつも頭のかたすみにあったのですが、やはり太兵衛さんが造ったというのは信じられませんでした。

でも太兵衛さんについての本を読み進んでい

くうちに、何年もの年月をへてでき上がったことがわかりました。

そして、この川を造っていくうえで、とても苦労されたこともわかりました。

私が、一番太兵衛さんが行われたことで感動したことは、川を造る工事をやっていくなかでけが人や病人などが出ないように、毎日どんな日でも古浦の浜で体を清めておられたことです。何よりすごいなと思いました。私には到底真似できません。

そして太兵衛さんは、いつでも人のことを考えておられました。「自分のことより人のこと、村のこと」これが太兵衛さんのモットーなのではないでしょうか。私は、こんなふうに考える太兵衛さんを素晴らしいと思っています。

現在、自分のことより人のことを考えている人が、何人いることでしょう。太兵衛さんはそういう面でも現代人の鏡です。太兵衛さんのように心のきれいな人になれたら、どんなにいいだろうと私は思っています。

そして、この川を造る工事にたずさわった方々に、お礼を言いたいです。

それにこの川がなければ、今だに洪水がおこっているかもしれません。この川を造ってくださったおかげで、今は洪水などほとんど起こっていません。

太兵衛さんは川を造るという夢をずっともっておられ、その夢がかない、一生を川造りにささげられました。そのように、一つの夢に向かってつき進んでいく気力を真似していきたいと思います。

そういえば、小学四年生の時、佐陀川見学をしたことを思い出しました。

現在、佐太神社から百メートルほど松江方面に向かった所の橋の付近を潟の内といって、水が沢山出て工事を進める上でとても難所だったと聞きました。そしてその付近を工事していた沢山の人がなくなられ、心を痛められた太兵衛さんは、朝日寺に参拝しました。

そして近くの山から大きな石を運び出し、佐太神社に寄進されたそうです。

出雲地方では十一月を神在月といいますが、佐太の社（やしろ）には、神様がやどって見守っていらっしゃるのでしょう。

祖母に聞きましたが、陸上交通が盛んでなかったころ、佐陀川には船が行きかい、鹿島と松江をつないでいたそうです。

そのようなことを考えながら、再度考え深く読みました。

清原太兵衛さんは、郷土のまさに英雄といえます。鹿島町は、佐陀川を無くしては語れません。

治水と戦った清原太兵衛

鹿島中学校　二年　井上　雅博

「佐陀川を作った人ってすごいよなあ」と僕は、いつも思いながら学校に通っている。時には、佐陀川で釣りをしたりして遊び、ある時には、佐陀川から学び、僕にとって佐陀川は、なくてはならない物のように思っている。この佐陀川を昔の人達は、どうやって作ったのか、なぜ作ろうと思ったのか、どんな気持ち、どんな願いで作ったのかと日々、思うのである。

江戸時代の初期まで、出雲平野を流れる斐伊川の水は、西に流れて日本海に注ぎ込んでいた。ところが、寛永十六年（一六三九年）の大雨で、斐伊川の本流は東に流れを変え、宍道湖に流れ込むようになった。これが、宍道湖増水の始まりである。

その後宍道湖は、雨のたびに洪水になり、家や田畑が水につかるようになってしまった。このような時代に清原太兵衛は、生まれたのです。享保六年（一七二二年）出雲地方を大風雨が襲い、洪水となった。翌年、追いうちをかけるように、暴風雨が再び襲った。

この被害を、目の当たりにした太兵衛は、洪水を無くそう、自分がやってみせると考えたのです。その頃の太兵衛は、十二・三歳だったようですが、普通十二・三歳の少年が、自分が洪水を直してやるなんて思うのでしょうか。僕なら、洪水は、自然が起こすことなのでしょうがないと考えます。

太兵衛は、治水をやるには武士にならないといけないと聞かされ、武士になろうと決心したそうです。でも、太兵衛の時代は、まだ身分制度が厳しいので、農民から武士になれるのかなあと思いました。

そして、太兵衛は、十五歳になると、松江藩に仕える青沼六郎左衛門に仕えた。太兵衛は、青沼のもとに、十六年間もの長い間仕え、そこで、土木を学び、治水を学び、建築を学んだ。太兵衛の実直な人柄と、学問の秀でた力は、次第に評判となり、松江藩家老、三谷権太夫の知るところとなった。

太兵衛は、青沼六郎左衛門のとりなしによって、ついに松江藩に仕えることになった。家庭のことは、すべて妻に任せ、太兵衛は、お城の勤めに専念した。そのかいあって、安永五年（一七七六年）太兵衛は、六十六歳で、現場監督を命じられたのである。現代ならば、定年退職で現役を退くという歳になって太兵衛は、やっと、五十年前の少年の日の夢が実現しそうになってきた。

そして、天明の大飢きんがあり、これをきっかけに、新川を作ることになり、太兵衛が呼ばれた。天明五年（一七八五年）三月、太兵衛は、佐陀川の工事に着手した。太兵衛は、すでに七十四歳になっていた。いざ工事をすると、農民達の土地を使うので、農民達は、反対した。しかし、太兵衛は、力づくで追い返そうとはせず、説得し続けた。

川の本格的な工事が進むにつれ、苦労に苦労を重ねる難工事になってきて、けがをする人や何人もの尊い命も失われたが、太兵衛は、工事をやめようとはしなく、完成を祈り続けた。いろんな人から反対されたり、犠牲者が出たりと、太兵衛さんはすごく苦労しただろうなあと思う。ようやく佐陀川が、完成したけれど、竣工式の前に亡くなったそうです。

太兵衛さんは、自分の命と引きかえに、みんなが少しでも幸せな暮らしができるようにと、願いを込めて佐陀川を作ったのだと思います。最近の人は、自分がよければそれでいいと思っている人が多いんじゃないかなあと思います。しかし、太兵衛さんは、そんな考えではなく、みんながよければそれでいいという、考えを持っていたでしょう。この考えを持っていたからこそ、佐陀川ができたのだと思います。

太兵衛さんは、とてもすばらしい人です。世のため人のために自分の命を捨ててでもやるという強い意志に僕は感動し、心を打たれました。この太兵衛さんの、世のため人のために命を捨ててでもやるという意志や、あきらめてはいけないという根性を、これからの二十一世紀に生かし、清原太兵衛さんみたいな立派な大人になろうと僕は思う。

作品

清原太兵えを読んで

東小学校　三年　井上　恵理

わたしの家は、佐陀川ぞいにあります。佐陀ばしは、よく通っています。佐太神社に遊びに行く時は、かならず通ります。雨がふった時は、水がにごり、流れが早くなり、水もいつもよりふえて、ながされて行きそうな感じがします。

小さいころから、川を見てきて、三年生になってはじめて清原太兵えの本を読み、佐陀川を作った人とわかりました。

清原太兵えは、小さいころ、しん道この水があふれて人々がこまっているのを見て、自分がどうにかしなくてはと考えている人でした。十五才になって、ぶ士になり、しぬまで、一生けんめいまつ江の人々のことを考え、みんなを助けた人とわかりました。

いつも、佐陀川で魚つりや、しじみを食べていますが、こういう大きな川を作った人が、いたということは、すごいなとおもいました。

わたしは、しぜんに、この川ができたのかなと思っていましたが、むかしは、こうして、この川を作るのにたくさんの人の手で作られたことがわかりました。

川を見ると、よくゴミなどがういています。この清原太兵えという人がくろうして作ったことを思い、これからわたしも、川をたいせつにしたいと思いました。

清原太へえの本を読んで

東小学校　三年　くわたに　ごう

清原太へえは、さだ川を作った人だと聞いて、ぼくは、おどろきました。さだ川は、ずっと前からあって、人が作ったなんてしんじられませんでした。

でも、本を読んでいくうちに、だんだんといろんなことがわかってきました。

大雨がふり、しんじこの水が、家や田畑をだめにしていました。

清原太へえは、子どもの時、大こうずいの後の、水がひいた町や村を歩いて見て、「だれかが、こう水をなくさなきゃ」と思って自分がやるしかないとけついしたところが、すごいなと思いました。

たくさんの家がこわされ、田畑がだめになり、食べる物もなくなり、土まで食べてしんでしまった人たち。

ぼくは、そんな時だいに生まれてなくてしあわせです。

清原太へえは、お父さんが、しんでしまっても、ぶしになって、大こう水をなくそうと、強くけっしんしていました。

大こう水をふせぐのには、しんじこの水を日本かいにながすのに、大へんな工事でした。ぼくたちの通学路に、ながれているたく川が、り用されて、工事の日数が、みじかくなったようです。

でも、工事の計画を立ててから、仕事にとりかかるまでに清原太へえは、七十四才になっていました。ぼくは、そんなに、おじいさんになって、心配になりました。

何回も、しっぱいが、つづきました。

そのうち、病気になってしまいました。

川がかんせいした時は、たくさんの人がよろこんでいたけど、そこには、清原太へえはしんでしまっていませんでした。いっしょうけんめいくろうしたのにざんねんです。

ぼくは、今まで清原太へえのことなどなにもしらないでいたけど、清原太へえのおかげで、大こう水にあわずにいられるんだと思いました。

ぼくは、決意したことでも、と中であきらめそうになることがよくあります。清原太へえは、子どものころに決意したことをがんばり通しました。

一度決めたことは、ぼくもがんばりぬこうと思います。

清原太兵衛（きよはらたへえ）を読んで

東小学校　三年　坂本ひろし

ぼくは、まん画の清原太兵えを読みました。なぜだかというと、読みやすくてまん画だとむかしの事がわかりやすいからです。

本をか島町からもらってから、少しずつ読みました。

えど時代に太兵えが、水がいから人びとを守るために水とたたかいつづけた、い大な人のお話です。

大雨がふるたびにしんじこの水があふれて、町や村が水につかった。

いろんな山から、しんじこに水が集まってきた。

ぼくは、しんじこの水があふれるのがしんじられません。

太兵えが、子どものとき、なん回もなん回も大雨になって、家や田んぼや畑がながされて食べ物がなくなって、たくさんの人が死んだりしました。

ぼくは、かわいそうだと思いました。

絵に家や田んぼなんかが流れるのが書いてあってよくわかりました。

勉強は、寺小屋でおしょうさんが教えました。

頭はちょんまげでした。

着る物は、着物を着ていました。

冬は、さむくないかなあと思いました。

はく物は、ぞうりやげたをはいていました。

おさむらいさんは、たびをはいていました。おさむらいさんは、刀を持っていました。

松江のじょう山に、おとのさまが住んでいました。

ぼくは、すごいなあと思いました。

太兵えが、大きくなってから、しん道この水いを下げるには、みずうみの水を日本海に流すしかないと思いました。

はまさ田から川をほるのがよさそうだと思いました。

しん道こから日本海まで八キロメートルもあります。

ぼくは長い長い川をほるのは、たいへんだなあと思いました。

川をほるのにたくさんの人がくわでほりました。

土や石は、てんびんぼうで二人でかついで運びました。

今は、ショベルカーやトラックで工事ができてべんりなのに、むかしは大変だなあと思いました。

工事のときも、大雨になって、みんながいっしょうけんめいほっている所が流されて何人も死んだりしました。

何回も何回もやりなおしをして川を作りました。

太兵えが考えたとおりに、しん道この水はさ陀川を日本海まで一すじに流れ始めました。

川のまわりには、畑や田んぼができました。

しん道こから水があふれなくなりました。

清原太兵えたちのほった川で、家や田んぼなんかが守られてよかったです。

清原太兵衛の一生

恵曇小学校　四年　青山　香澄

佐陀川を作った、清原太兵衛という人は、何年も何年も苦労して、とうとう、水害をふせぐ川を作るという目的をはたしました。

昔、松江藩のじょう下は、宍道湖の水があふれ、何度も洪水になって、大変だったそうです。清原太兵衛は、子供のときから、水害を無くそうと考えていました。わたしなら水害を無くすためとはいえ、苦労することがわかっていながら、川を作ろうなんて、思わないでしょう。でも、清原太兵衛は、どんなに苦労しても、川作りをあきらめませんでした。

今、わたしたちが水害のない生活ができるのは、こうした、清原太兵衛のがんばりがあったからだと思います。

今の時代、いつ水害が起きたとしても、ブルトーザーや、ダンプカーなど、たくさんの機械やせつびですぐになおすことができます。

でも、清原太兵衛が、佐陀川を作っていた時代、工事用の機械や、コンクリートがなかったので、人の手で工事をすすめていかなければなりませんでした。きっと、そのころの川作りは、

とても大変だったと思います。
しかも、工事期間は三年。わたしは、人だけの力で、それも三年の間にどう工事をすすめていくのかと思いました。
佐陀川のかんせい。でも、そのとき、清原太兵衛はいませんでした。佐陀川が、全部かんせいしたところを、たぶん、見たかったと思います。清原太兵衛がいなかったら、松江は、それから何年も洪水などの水害に、まだ、こまっていたと思います。
だれでも、洪水をふせぎたいと思うはずです。わたしが、清原太兵衛のすごいと思うところは、清原太兵衛は、思うだけでなく、思っていることをやってのけたというところです。わたしは、大きなことをやろうと思っても、やりのこしがあったりして、すぐにあきらめてしまいます。思ったらやりぬく、それをわたしは清原太兵衛に教わりました。

清原太兵衛は一生のほとんどを佐陀川のためにつくしました。
清原太兵衛は、わたしのそんけいする人です。社会科で、清原太兵衛の勉強をして、とてもよかったと思います。身近な佐陀川は、自然にずっと前からあった川だと思っていましたが、勉強をしたら、人の手で作られた川だということがわかりました。
長さや深さやはばも、全部勉強してわかったことです。
この勉強をとおして、あまりきょう味をもたなかった社会科の勉強も、好きになりました。
これからも、図書館の本や、学校にある本で、わからなかったことを調べてみたいです。

清原太兵衛の本をよんで

佐太小学校　四年　井ノ口香織

清原太兵衛はすごい人だなぁと思いました。なぜかと言うと、佐陀川を作るための計画を自分で書き、十三回もおねがいをして、やっとみとめられるまでがんばったからです。また佐陀川を作り、水害をふせぐことは、人々の生活のためを思って考えたことなので、やさしい人でもあるんだなと思いました。
川を作る前は、水害によって食べ物がなくなったので、人々は土をほり畑を作りましたが、水害は何度も起こったので、ほってもほっても無だでした。ある年は、二百二十九人もの人が死に、牛馬百三頭も死んだそうです。
川を直線にするため、人々の家や田畑をなくさないと川は作れない。太兵衛は人々にたのみましたが、なかなかわかってもらえなかったそうです。昼工事をするとじゃまをされるので、太兵衛は夜中に少ない人数で、あかりをつけて工事をしました。私なら反対されたらあきらめてしまうところです。家や畑をくずされるのがいやなのは分かるけれど、川を直さないと、水害のたびにほとんどの人が死んでしまいます。何とかみんなにも分かってほしいと思いました。
そして太兵衛の気持ちが伝わったのか、人々もようやく分かってくれました。あきらめずに工事を続け、本当によかったなあと思いました。
計画では全長三里（十二キロメートル）、川はば二十間（三十六メートル）、深さ一間（一・八メートル）もあり、工事の期間三年働く人一日三千人、費用二百三十両もかかったそうです。働く人が一日に三千人なんて、すごい人数だなあと思いました。
結局太兵衛は、佐陀川の完成を見れずに死ん

だそうです。太兵衛が死んでまもなく佐陀川は完成しました。せっかく完成した川を見ることができなくてかわいそうだと思いました。もし生きていたら、「やっと苦労がむくわれた。」と、とても喜んだんじゃないかと思います。

前に社会の勉強で佐陀川の見学をしました。初めはこの川が人が作ったものだとは思えませんでした。深さを測ってみてもけっこう深かったし、川はばも広かったからです。バスで川にそって走った時も、予想したよりずっと長さがあるのでおどろきました。

佐陀川は、きれいな所ときたない所がありました。特に私の家の近くの佐太神社の所には、あきかんやスーパーのふくろなどがたくさん落ちていました。せっかく太兵衛さんが一生けん命作った川なのに、よごしたらいけない、大切にしないといけないと思いました。いつまでもきれいな佐陀川になるように、ゴミなどぜっ対に川にすてないようにしたいです。

清原太兵衛を読んで

佐太小学校　四年　平塚　智子

清原太兵衛の時代には、生まれた時からこう水があって、大変な時だなと思いました。

ぶ士になってこう水を何とかしたいと思った太兵衛は、五才の時、六郎左衛門という人と出会い、

「十五才になったら、わしをたずねて来るといい。」

と、約束をしてもらいました。六郎左衛門は十五才になるまでにわすれてしまうだろうと思っていたけど、太兵衛は十年後も覚えていました。

早くこう水をなくすようにしたかったんだと思います。

太兵衛は十五才になり、六郎左衛門の家をたずね、ぶ士になるため、けんじゅつを習いました。休日には家の田畑を手伝い、夜はぶ士としての勉強が続きます。休日にも休まず働くなんて大変だと思います。ぶ士になれてよかったなあと思いました。

しかし一七三二年にはこう水が起こりました。さらにイナゴが大発生し、田畑の作物を食いつくして、日本全土で数十万人の死者が出ました。今はきらいな物があったら残したり、あまった食べ物はすててしまうことも多いです。私も、ほしぶどうは苦手で、家では残したりするのに、食べ物がなくなり死者まで出るなんて、今では考えられないおそろしいことだなと思いました。

太兵衛は六十才代から出世をし、七十一才でふしん方ぎん味役にまでなりました。その時から佐陀川を作るため、何回もねがいじょうを出し、やっと七十四才の時にきょ可されました。私なら一回ことわられたらあきらめてしまうのに、十二回もねがいじょうを出し続けたのです。最後までがんばる人なんだと感心しました。

七十四才といえば、私のおじいさんと同じくらいの年です。おじいさんは、一人であまり外に出ることはありません。しかし太兵衛は人々に反対されながらも、夜中まで川の工事をこつこつとやったのです。とても大変だっただろうと思いました。

太兵衛は佐陀川の完成を見ないで死んでしまいました。年をとってから夜中も働いてがんばったのに、とてもかわいそうです。少しでも佐陀川の完成した所を見せてあげたかったです。

佐陀川がなければ、こう水のたびに今でも田んぼのお米が流され、昔みたいに食べる物もなく、死ぬ人が出たと思います。学校や友達の家、

いろいろなものも次々になくしてしまったと思います。佐陀川が完成し、今のくらしができ本当によかったと思いました。

「清原太兵衛」を読んで

東小学校　四年　井上　雅貴

ぼくは二学期の社会科の時間に、佐陀川や佐陀川を作った太兵衛さんのことを勉強しました。実際に宍道湖から佐陀川にそって歩いてみたりもしました。だから、この本の内容はとても身近に感じられたし、出てくる地名もよく分かりました。

しかし、ぼくは太兵衛さんが子供のときから佐陀川を作り洪水をなくすことを考えていたことを知って、たいへんおどろきました。佐陀川を作ることは、太兵衛さんのお父さんの願いでもありました。太兵衛さんのお父さんが願い出ても許してもらえず、その後太兵衛さんが十二回も願書を出して、許可が出たのは、太兵衛さんが七十四歳の時でした。こんなおじいちゃんになってもだいじょうぶかなと心配しました。

工事にかかった時は村人から神の怒りをかうと反対され、くいを抜かれてしまいました。その時神の怒りをしずめるため雪の中神社めぐりをしました。

しばらくした後妹の順は兄のために人柱になりました。このことはとても悲しかったけど変な事をするのだなと腹が立ちました。工事中もたたらがなんどもくずれたり土砂がなだれたりして作業人がたくさんなくなりました。

ぼくは、佐陀川が自然に出来たものだとずっと思っていましたので、こんなに苦労して、作

られたと知り、とても感動しました。

佐陀川ができたおかげで、水害はなくなり水田は開け、舟が通る運河が出来たため、松江や鹿島が栄えることが出来ました。そして今、ぼくたちが洪水の心配をしないで、安心して暮らすことができます。

ぼくだったら、とても無理だとあきらめたことでしょう。太兵衛さんはくじけなかったし、あきらめなかったから、すばらしいと思いました。もし太兵衛さんがいなかったら、またいても工事をしていなかったら、まだここはもしかしたら洪水になやまされていたかもしれません。ぼくは太兵衛さんに、

「洪水をなくしてくれてありがとうございました。ごくろうさまでした。」

と、言いたいです。

太兵衛さんは、神名火山へ登る途中で死んでしまいました。七十六歳でした。太兵衛さんはきっと、お父さんにとてもほめられたと思います。そして、天国から、佐陀川を見ていることだろうと思いました。

清原太兵衛を読んで

東小学校　五年　宮廻　由衣

私が、清原太兵衛さんを知ったのは、四年生の社会の時でした。

清原太兵衛さんは、すごいなぁと思いました。子どものころに、洪水をなくすにはどうしたらいいかなどを思っていたことなどがすごいです。私だったら、そんな大変なことなどはしようとも思ったことがないです。そのまえに、できるわけがないと思っているからです。

でも、清原太兵衛さんは、その思いを大人になるまでずうっと、ずうっと心におさめていたと思います。

「工事の途中で何があるかわからん。何があっても取りみださん。」

と言った清原太兵衛さんがカッコイイと思いました。人のために役立てることは、いいことだと、この本を読んで強く心にいんしょうづきました。

村人が、何をしようが、太兵衛さんたちは、いっしょうけんめいやったのもすごいです。

やっぱり、あの言葉は、うそじゃなかったんだぁと思いました。

毎日、毎日恵曇の海岸へ行き、海水で身体をきよめ、佐太神社までの一里を口に海水をふくんだまま歩いて、神社でいのった。

雨の日も、風の日も毎日つづけた。たとえ人が死んでしまってもつづけた。私は、

「清原太兵衛さんは、どんなことがあっても、くじけたりしないから、すごい。」

とびっくりしてしまいました。

たとえ、病気になってしまっても、自分がせきにんしゃだからとかいって、むりしたから、ますます、病気がひどくなっていったと思います。

だけど、努力しつづけ、みんなで大石をはこんだ。太兵衛さんは、よくこんなことにきがついたのだ。私はそれにかんどうしてしまった。

さいごは、約束をはたしました。雪がふっているのにでかけたのです。「ハア、ハア、ハア…。」と言いながらも。ここまでがんばってやってきたけれど、川の音もきけずに亡くなられたのがすごくかなしかったです。

もし、佐陀川を太兵衛さんがつくっていなかったら、私たちも洪水にあっていたと思います。私は太兵衛さんに一言言いたいことがあります。

それは、

「佐陀川をつくってくれて本当にありがとうございました。おかげで、洪水などもなかったけれど、この本を読んで、私も、人のためになにかやってみたいです。できれば、がんばりたいです。応えんしてください。」

と天にむかって、とどくくらいの声でいいたいです。

川を作った人、清原太兵衛

東小学校　五年　桑谷　亮介

ぼくは、前に清原太兵衛の勉強をしたことがあったので、この本にとてもきょうみがわきでました。そして、読めば読むほど清原太兵衛の事を、とてもすごい人だと思うようになりました。太兵衛は、大洪水になやむ村に生まれました。おとなでさえあきらめていた「川を作る」という事をいつも考えていました。

太兵衛は、佐陀川を作った人です。

さだじんじゃの寄進手水鉢も毎年おまつりのとき、手をあらっていたけれど、はじめて太兵衛の考えで作られたことをしりました。ぼくは、太兵衛にとってもしたしみがわいてきました。

太兵衛が川を作るとき、村の人はみんな反対しました。くいをうってもぬかれ、太兵衛は、とてもこまりました。それで考えたのが、夜、人にわからないように作業をすることでした。その結果、村人たちにもいきごみがあらわれてきました。

ぎせい者もたくさん出ましたがりっぱな川が完成しました。ぼくは、太兵衛がさいごまであきらめずにやりとげたことが、とてもうれしく、

なんてりっぱな人なんだろうと感動しました。太兵衛がいなかったならどうなっていたんだろうと思うと、少しこわくなりました。

自分がやると決めたことを最後まであきらめず、責にんをもってやりとげた太兵衛を、ぼくはそんけいします。

清原太兵衛を読んで

東小学校　六年　田中あゆみ

清原太兵衛は、人生を佐陀川を作るためという一心でささげました。しかし、そんな太兵衛の思いもなかなか伝わらず、佐陀川開さくはさけられてばかりでした。それでも太兵衛は何度も何度もお願いし続けていて、私は、太兵衛の努力と根性をとてもすごいと感じました。

そして太兵衛の思いはやっと伝わり、太兵衛七十四歳の時許可されました。本を読んでいた私もうれしかったので、太兵衛の喜びはとても大きかったと思います。

しかし川作りというものは私が思っているよりすごくたいへんだということが分かりました。そのため太兵衛もずいぶん苦労したことでしょう。太兵衛は子供のころから、自分のことより、他の人たちのことを考えていました。それはとても大事なことだと思います。そんな太兵衛だったからこそ、佐陀川を作ることができたのだと思います。

太兵衛は、何よりも楽しみにしていた佐陀川の開通式を間近にひかえ、この世を去ってしまいました。もうすぐ開通式があるので、ほっと安心したのかもしれません。

今、私たちが平和に安心して暮らせるのは、清原太兵衛のおかげだと思います。太兵衛が佐陀川を作ってくれなかったら、今も松江市や宍道湖周辺の村々は雨がふるたびに、洪水になり、こうして安心して、平和な毎日をおくることはできなかったと思います。それを変えてくれた太兵衛には本当に感謝します。

私も太兵衛のように、一度決めたことは最後までやりぬきたいと思います。そして何事にも努力していきたいと思います。

最後に、自分のことより他人のことを考えることが、できるようになれたらいいなあと思います。この本のおかげでいろいろなことが学べ、清原太兵衛の人生をよりくわしく知ることができました。

この本はこれからもずっと鹿島町に残して、いろいろな人が読むといいと思います。

私は、この本のことを忘れることはないと思います。そしてさっき書いた三つのことができるようになるとうれしいです。そのために努力していこうと思います。

「清原太兵衛」を読んで

東小学校　六年　古瀬芙久子

この本は、他の二冊の本とちがって初めの方に序文（じょぶん）が書いてあります。いきなり本文が書いてあるより、序文が書いてあって本文が書いてある方が、分かりやすくて楽しく読めました。

清原太兵衛のことは、四年生の時に習いました。この本には、四年生の時には習わなかったことがたくさんのっていました。その中で、一つおどろいたことがありました。

それは、「太兵衛ガニ」。「太兵衛ガニって何だ

ろう。」と思いながら読んでいたら、「太兵衛ガニ」というのは、学名は「はまがに」と言うそうです。「太兵衛ガニ」の太兵衛というのは、清原太兵衛さんの太兵衛からきているのだそうです。

「えっ、でもどうして太兵衛とつくんだろう」と、気になっていました。そのわけは、太兵衛さんが佐陀川を作るのに、地元の人たちが反対をして、工事のじゃまをしてなかなか工事がすすまなく、太兵衛さんは、夜工事をしたそうです。だから、夜行性のはまがにを、太兵衛ガニと呼ぶようになったそうです。それから、私は見たことありませんが、太兵衛ガニのこうらはひたいにしわを寄せた人間に見えるそうです。私も見てみたいなぁと思いました。

四年生で習った時も太兵衛さんはすごい人だと思ったけど、この本を読むともっともっとすごい人だと思いました。

私は一つ太兵衛さんがかわいそうな所をみつけました。それは、せっかく佐陀川を作ったのに、佐陀川の活やくを見れずに死んでしまったからです。

でも、太兵衛さんはうれしかったのかもしれません。このことは本には書いてありません。でも、この本を何ども読んでいると、なんとなく分かってくるような気がします。それだけ、太兵衛さんはすごい人なのかもしれないと思いました。

「清源太兵衛」を読んで

鹿島中学校　一年　森脇多江子

「きっと水害のない村を実現する」と誓った太蔵は、私と同じ十三歳なのにすごいと思いました。私なんて、まだ進路も決めていないのに太蔵は、このころから、人の役に立つことをしたいと思っていて、それを本当に実現させたんだからえらいと思いました。

清原太兵衛のことは、小学校のとき少し習ったけど、「佐陀川をつくった人」ということしか頭にありませんでした。でも、今考えると、この人がいなかったらもっとたくさんの人が水害でなくなっていたのかもしれません。

私が、いつも登校途中に、見ている佐陀川、今は、緑色だけど、むかしは、澄んでいて、とてもきれいだったと母に聞きました。

太蔵は、水害をなくすために、何年も、がんばっていったのに、せっかくつくった川も今は、だんだん、よごれてきています。本当にこれでいいのだろうかと思いました。

太兵衛は、私とは、正反対で、頭がよくて、まじめで、太兵衛だったから、大きな川が作れたんだと思います。それに、大変なことなのに、あきらめずにつづけられたのは、むかしの大洪水であったようなことは、もう見たくなかったし、父が死んだのも、洪水が原因だったからです。

限られた期間でつくるのは、大変だし、工事で、いろんな人が死んでいくのも、つらかったと思います。それに、今とむかしはちがうし、今だったら、川をつくるのも無理かもしれません。今だったら、家をとりこわすのもむかしよりも、だいぶ大変で、町の人も絶対反対すると思います。川をつくるのも、むかしだったからできたことだと思いました。こんなにがんばった人だから、もっとたくさんの人に知ってもらえたらいいと思いました。

太兵衛は、川が完成する直前になくなりました。せっかくできたのに、水が流れるのも見れ

ずに死んでとてもかわいそうだと思いました。太兵衛は、死ぬときまで、まわりの人に迷惑をかけないようにしていてすごいと思いました。

私がいつも見ている川が、こんなにたくさんの人たちの手でつくられていて、そのために、死んだ人たちがいて、川をつくるのにもすごい人の力がいることも分かりました。太兵衛が、むかししてもらったように、清三に同じことをしていて、それを見て、太兵衛を尊敬していて、清三も、太兵衛と同じようになるんだろうかと思いました。太兵衛も清三も、もとは、農民で、性格も似ているのでそう思いました。太兵衛のような人がたくさんいれば、もっと川づくりが早く終わっていたのかもしれないと思います。

初めは、農民だったのに、武士にまで、あがっていったんだから、すごいと思いました。でも、川をつくるために武士になろうと考えていて、普通の人だったら、ぜったいにと中であきらめるのに、それができたのもすごいと思いました。

私も、少しは、人の役にたつことをしないといけないと思いました。これからも、佐陀川を大切に守ってほしいと思います。

「清源太兵衛」を読んで

鹿島中学校　一年　木村　大輝

この清原太兵衛さんは、本当に自分の夢をあきらめない人です。佐陀川をつくるために自分の全てをたくしてまで、つくろうというなにかをもっていてぼくはすごいなと思いました。読んでみると、小さいときからガンコで、将来武士になると親に言うと、答えは「絶対だめ」だったけど太兵衛はガンコなので三ヵ月も口を聞かないというガンコぶりをみせてみごと親から武士になるゆるしをうけました。

さて、こんな太兵衛が十五才になりついに武士になりました。だけど世の中はまだまだよくなりませんでした。ぼくは、だれかがやらないかぎりぜったいにひがいはおさまらないと、本を読んでいくうちにこの世の中に人達の無せきにんさにすこしいかりを感じました。だけど、ぜったいにこの人がやってくれるというきたいかんも逆に感じました。

太兵衛もすでに七十歳になっていました。それでまだ工事を進めてないというからとてもおどろきました。太兵衛は、なんども松江はんに願書を届けました。だけどやはり結果はダメだったけど、もちまえのガンコさでねばりにねばってやっとゆるしを、えました。

工事を進めるにあたってもとても大変なことばかりで、太兵衛はとてもなやみました。だけどやはりガンコだという面で最後までがんばりました。そして何かいか失ぱいしたのち、ついに佐太川が生まれました。

ところで、ぼくの家は佐陀川に面した家で、つなみ、大雨がふるとけっこう家はあわただしくなります。だからすこしだけ太兵衛さんの心がわかったような気がします。

この本をよんで、自分の夢をぜったいにかなえようとするまっすぐな心とガンコさがある太兵衛さんのような人になりたいと思いました。そして、なにをやるにもぜったいにだれかががんばらなくては新しいことはぜったいうまれないんだということを、ぼくはおぼえました。

清原太兵衛

鹿島中学校　一年　加藤　美佳

私は、この本を読むまでは「清原太兵衛は、佐陀川をつくった人」ぐらいにしか思っていませんでした。

でも、洪水をなくしたいために子供のころから最後まであきらめずにがんばったことを私もみならって、これからの人生にいかしていきたいところです。清原太兵衛は佐陀川をつくるために生まれてきたみたい……と私は思いました。

私の家の近くに佐陀川があります。川の水はうすい緑の色をしています。でも、父や母に聞いて見ると、子供のころは佐陀川で夏泳いでいたと言いました。それほど川の水がきれいだったということです。そんなにきれいな水を「武代橋」から見てみればどんな気持ちになるでしょう。そんな川が私達はこれから見れるのでしょうか。あの時代に七万人の人達がとてもくろうしてできた川をもっともっと大事にしたいと思います。そしてまた、きれいな色の美しい川が見たいです。でもそのためには、みんなが佐陀川をきれいにしたいという気持ちも必要だと思います。

私は、清原太兵衛のかつやくぶりを、清原太兵衛の父、母にも見せてあげたかったなと思います。でも、きっと分かってると思います。

私の家から少しいったところに「朝日山」があります。階段を最後まで上がれば上がるほど家や建物などがどんどん小さくなっていきます。でも小さくなるほど、「宍道湖」の大きさがよく分かります。宍道湖から日本海までをつなぐ川の全部は見えないけど部分的に見えるところもあります。清原太兵衛も朝日山に登って佐陀川の開さくを考え出したのだから、町の人達にも見てもらいたいなと思います。

私は清原太兵衛は鹿島町のほこりだと思います。でも清原太兵衛だからできたのではなくて、清原太兵衛には、子供のころからずっと洪水で人が亡くなったり食べ物がなくなったりした村や町の人達の助けたいという気持ちがあったからだと思います。だから、この鹿島町の人達もそんな気持ちになればきっと町のほこりになれる人が次々と出てくるんじゃないかと思います。そして清原太兵衛のように自分の人生にくいのないように私もがんばっていこうと思いました。

「清原太兵衛」を読んで

鹿島中学校　二年　小笹　美佳

家や田畑をうばった、たびたびの水害、その水害をおこした宍道湖は、雨のたびに水位が上がり人々に身も心も引きちぎられる様なきょうふ感をあたえました。自分がなんとかしなければと立ち向かった一人の救い主を一冊の本から、知る事が出来ました。

この本は、子供の頃から、常に洪水を防ぐために一生の悲願として強い心で立ち向かった太兵衛の偉大なる功績の書かれた本でした。

太兵衛は、農民の子供でしたが、水害で水がひいた町や村を歩いて見て、あまりのひどい姿に洪水をなくしたいとの思いを松江藩士青沼六郎左衛門に相談しました。子供である太兵衛は、洪水をなくすには工事が必要、人手、ばく大な

金、それに、松江藩の協力がなければいけないこと、しかし、それには、松江藩の武士にならなければいけない事をききました。どれも、これも、私には考えられない、むずかしい無理なことばかり、それなのに、太兵衛は、言葉を一つ一つとらえ、強い心をもって、大人へと成長していったのにはおどろきました。

大人として、まず初め武士にならなければいけません。その頃は、身分制度のきびしかった時代で、農民の子は代々農民、それでも農民出身の武士となり、その後「ふしんかたぎんみ役」という役をもらい、工事を願い出られる立場となり、実現にむかったそうです。

洪水を防ぐため水位を下げ、沼地だった所を水田にし、松江から恵曇港まで、船の航行が出来るように工事は進められました。

こうして、出来あがった佐陀川は、今も宍道湖の水を日本海に流し、湖や川の周辺には田畑が有り、かたのうちは海洋センターの練習池とし、佐陀川の河口にはレジャーボードや漁船が多さん有るそうです。

その当時、工事は思う様に出来ませんでした。とても大きな工事ですから、覚悟はしていても、いざ工事が始まると川をほっている所が何回もくずれ、けが人は出る、何人かのとおとい命も失われたそうです。信じん深い太兵衛は、佐太神社の神様に、「工事が終わり、川が開通したら、私の命などおしくない。自分の命とひきかえに、どうかお願いします。」と願いました。そうして、願いは聞かれ、本当に、完成まじかになって、太兵衛の命は、たえたそうです。

太兵衛、七十六才、うちのお祖父さんの年令とあまりかわらない、そんな年をとっても、郷土のために一生をささげたのですから、ふだん、何げなく見ている佐陀川も、太兵衛さんの命を投げだしてものすごい苦労の末に出来たという

こと、みんなが感謝せねばと強く思いました。太兵衛さんの行なった事を思うと現在、人が人の手によって命をうばう時代、とても自分さえよければ人はどうでもいいということが残念だと思いました。

「清原太兵衛」を読んで

鹿島中学校　二年　日名田直樹

この本を読むまでの自分は、清原太兵衛について「佐陀川を作った人」「佐陀川を作るのに反対した、農民たちを頑張って、説得した人」こういうことしか分かりませんでした。でも、この本を読んでいくうちに、自分との共通点や相手の気持ちなどが分かってきました。

まず、ぼくと清原太兵衛の共通点を考えると、いろいろ頭に浮かんできました。それは算数が、得意なことです。ぼくも幼いころは、得意だったのでよくテストでは、いい点を取って先生にほめられました。次に、太兵衛と同じく僕も長男で生まれたことです。でも僕は、家の跡を継がなくてもよかったのです。太兵衛と逆なところは、はっきりとものが言えないことや昔から、けんかが強くなかったことです。そのほかに、まったく正反対なところはやると決めたら絶対に誰が何といおうと、最後までやるという頑固さです。僕には、そんな頑固さはなくすぐあきらめる方です。

もし僕が太兵衛だとしたら、まず佐陀川を作ろうという考えは絶対思いつかなかったと思います。それに川を作ろうと呼びかけられても、死ぬのが恐くて逃げていたかもしれません。でも、これだけは太兵衛と同じ考えでした。幼い

ころは僕も勉強が好きで、まじめにやっていたと思います。しかも百姓だったとしても、勉強ぐらいはしたかったでしょう。

昔に自分が農民の立場だとしたら、洪水の被害で苦しめられたでしょう。特にひどかったならば、食べ物がなく困ってしまい、草や昆虫など食べれる物は、とことん食べていたかも知れません。それに、洪水を止める対策を藩にたのんでいたかも知れません。それがだめだとしたら、自殺をしたりするでしょう。なにせ、生きていてもつらいだけなので死んだ方がましだと思う人もいたと思います。

この本を読み終わった自分は、何かとてもいい気分でした。いつもは「ハラハラ、ドキドキ」とする本しか読んだことがなかったけれど、この本はちがいました。それは、僕の住んでいる鹿島町のことを物語になっていたからです。今は、佐陀川として知っているけど、昔にいろいろな出来事があったのでした。それには、佐太神社境内に手水鉢がおかれています。それは清原太兵衛が、貴社の身澄が池を移したかわりに寄進したものだったのでした。ほかには、宍道湖周辺に大雨が降ると、洪水となり悪魔に変わるが、今は恵みの水としてかわり、不安だった農民たちが見たら、とても喜んだでしょう。その顔が頭に浮かんできます。このように、この本を読むと勝手に想像してしまい、気持ちがすっきりします。

この本を読んで一番心に残った言葉は、幼い頃太助がいった「だれかがやらなければ洪水はなくならない」この言葉だけは忘れられませんでした。なぜなら心に「グサッ」ときたからです。

この本を読んで自分に必要なのは、自信を持ってやらないといけないことです。いつも僕は中途半端で終わってしまい、だめになることです。

だからこれからは、自信をもってやりたいです。

この本で一番いいたいことは、進んだ考えと献身的な努力があれば何事も、なにかいい事はあるということです。それがなければ、今こうしてできている佐陀川はなかったと思います。

すごいぞ清原太兵衛

鹿島中学校　三年　石橋　裕幸

鹿島町になじみ深い清原太兵衛。佐陀川をつくった人で有名だが、本を読んで本当にすごいと思った。

まず初めにすごいと思ったのは、なんと十歳くらいから「宍道湖の洪水をなくしたい。」と言っていたことだ。僕は本当におどろいた。十歳でそこまで考えていたとは、やっぱりすごいなと思った。僕が十歳の頃というと、やっぱり遊びたい年頃で、めちゃめちゃ遊んでいたと思う。なのに太助（太兵衛の幼名）は、村の人達が苦しんでいるのを見てそう思ったので。本当にいい人だと思った。しかも洪水をなくすために、「百姓から武士になりたい。」とまで言っている。十歳で、小さいときから大物だったんだなと思った。

次にすごいと思った事は、十五歳から三十歳までの間、寝るまもおしんで武士の勉強をしていたことだ。昼間は主人に仕え、武士としての心得のため剣術を習い、休日は家の田畑を手伝い、夜は武士としての勉強をやる。そんなことを十五年間も。武士の勉強だけでもたいへんなのに、田畑も手伝ったり、ほんとうによくがんばったなと思った。よく体をこわさないなと思った。こんなところが清原太兵衛がすごい人になっ

たということに、結構関係していると思う。集中力、精神力などもきたえられて、この後、あんなすごい事をやったんだなと思った。

更におどろいたのは、七十三歳になって、やっと新川をつくる許可がでたことだ。太兵衛が、「洪水をなくしたい。」と言ってから、じつに六十三年の月日が流れていたことになる。その間、太兵衛は、十歳の頃からずっと洪水を無くしたいと考えていたのだ。これはすごい。僕だったら、さすがにあきらめているかもしれない。こんなところに、太兵衛の優しさがみえてくると思った。ほんとうに偉人だなと思う。六十三年間はほんとうに長過ぎる。もうおじいさんになっているのだ。それなのに工事を行うなんて、大丈夫かなと思った。

そして、七十四歳にしてやっと工事がはじまった。なのに元気なのはすごいと思った。でもスムーズにはいかなかったらしい。農民達が反発をおこしたのだ。これにはむかついた。太兵衛が、せっかく洪水を防ごうとしているのに、田んぼが減るとかで仕事をじゃまするとは……。でも、あとから考えてみると、すこしだけわかるような気もした。農民達の気持ちが。前に一度、太兵衛じゃない人がやって失敗したからだ。でも、あとから農民達も協力したので、良かったなと思った。しかし、工事がおわりをつげる少し前、清原太兵衛は亡くなった。もう少しで川の開通式、みんなが喜ぶ姿が見れたのに、とても残念だったなと思った。

こう考えてみると、清原太兵衛というのは、めちゃめちゃすごい人だなと思った。この人のおかげで、今の松江もあるわけだし、鹿島町に流れる佐陀川もある。僕達は、それを考えながら生きていかなきゃなと思った。